

55

養育院の最も古い史跡： 明治6年に建立の大雄寺の養育院『義葬之冢』について

稲松 孝思

東京都健康長寿医療センター

養育院は明治5(1872)年に創立された東京の福祉・医療施設である。当初は鰥寡孤独の人を収容する施設であったが、140余年の歴史の中で各種福祉・医療施設に発展分化した。その歴史については、養育院60, 70, 80, 100, 120年史が編まれており、大久保一翁、渋沢栄一がその設立・発展に大きく貢献している。文献資料は一部が残されているものの、明治・大正期の建造物など、施設の多くが木造であり、関東大震災、先の戦災、施設の改築、引っ越しなどで形あるものは、ほとんど失われている。同時期に渋沢が関与して創設された富岡製糸場が、今日、世界遺産として残されているのと好対照をなす。そこで、僅かに残されている養育院史を語る、“形ある物”のうち、もっとも古い、谷中の大雄寺にある『義葬之冢』について述べる。

明治5年10月、ロシア大公を国賓として迎えるに当たって、急遽収容された浮浪者を本郷の加賀藩上屋敷の空き長屋(現東京大学医学部)に収容した事が、養育院事業のはじめとされる。五日後に収容者は浅草溜に移され、長屋は事務所として使用されたが、その痕跡は無い。明治6年2月、上野の護国院の一部(現東京芸術大学美術学部)を買い取って恒久施設を建設し、大久保一翁府知事が開院時に視察しているが、その痕跡もない。漢方の町医 村上正名が任用され、健康問題に対応したが、同年12月までに百余体の引き取り手のない遺骨があり、賄方赤井善蔵の菩提寺、台東区谷中の日蓮宗・大雄寺に葬り、「義葬之冢」が建てられた。高さ150cmの扁平な角柱型の三段墓である。墓石の正面には『義葬之冢』、背面には『明治六年癸酉始養窮民於養育院其死者葬此』と彫ってある。寺の過去帳には104名の記載がある(名前のみで姓や年齢はなく、男81, 女22, 不明1名で、戒名は6名のみ併記されている。なお、60年史に記載がある22名の年齢をみると、1-20歳3名, 21-40歳11名, 41-60歳5名, 61-80歳6名, 不詳1名である)。この義葬之冢は養育院創立当時の唯一の遺構である。長年、養育院の都職員により、春秋香華を手向けられて回向されてきたが、平成22年に『養育院を語り継ぐ会』により、由来碑が立てられた。なお同寺境内には、勝海舟、山岡鉄舟とともに幕末の三舟と言われる高橋泥舟も葬られ、文京区で最大の樟がある。なお、1872~2007年の135年間に、31038の霊が5箇所(谷中の大雄寺「義葬之冢」、了侘寺「慰霊碑」、那須塩原の妙雲寺「合葬碑」、館山市の大福寺「よい子のお墓」、府中市の多磨霊園「合葬冢」)に葬られているが、大雄寺の墓はその嚆矢をなすものである。それぞれに語り継ぐ会による由来碑が立てられている。

研究協力者：(大雄寺住職)北山孝雄、(養育院を語り継ぐ会)湊與志孝、中村弘、河西量次